
ユウト君とマユミちゃん

ランデブー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユウト君とマコミちゃん

【Zコード】

Z5620D

【作者名】

ランデブー

【あらすじ】

絵を描く事が大好きなマコミちゃんはユウト君に恋している。クラスメイトの皆は外で雪合戦をしているから教室には一人しかいない。告白のチャンスだけど、中々伝えられなくて……。

外は白の世界が広がっていて、子ども達は雪合戦をしたり雪だるまを作ったりしている。子どもは風の子といつから、皆元気に外で遊んでいる。

校舎には先生しかいないよね？ 寒いからって、ストーブの前を陣取っている子どもなんていないよね……つていたよ！ ニット帽を被つて首にはマフラーを巻いていて両手には手袋をしていてスケッチブックに絵を描いている女の子が。そんなに防寒しなくても服とズボンだけで十分じゃない？ この部屋ストーブで暖かくなってるし。

それともう一人いるな、雪景色をぼんやり見ている男の子。この子は女の子の子程防寒をしてないけど、ニット帽はしているな。

「ねえユウト君、外で遊ばないの？」

「寒いし遊ばないよ、マコミちゃんは？」

「私は寒いのが苦手だし絵を描いてるのよー」

「寒かつても絵は描くんだ。はいカイロ」

「」と笑つてユウト君はマコミちゃんにカイロを渡した。マコミちゃんはありがとう、と言つた後にクシヤミをした。

絵を描く事が大好きなマコミちゃんは何処へ行くにもお友達のスケッチブックを連れていく、晴れた日にはたまに駅前で似顔絵を描いてたりします。一人前じゃないので無料、絵描きのお父さんは有料です。

「クシヤミしたし一応確認するね、ないと思つけど」

そう言つてユウト君はおでこをマコミちゃんのおでこに付けた。マコミちゃんのほっぺたは赤くなっている、照れているのかな。

「うーん、熱はないね！ ホツとしたよ」

「……」

「熱あるかもーって心配したのに、お礼ないんかー」

「……あ、ありがと」

「コウト君は困った顔をして窓の方へと歩いていった。そしてまた雪景色を見ている、ぼんやりと。

右手で握っているカイロを見つめているマコミちゃんは、ため息を付いてカイロをポケットに入れた。

「今日はどっちが勝つかな? 雪合戦」

「んー、私は勝つのマサキ君だと黙つよ」

「何で?」

「だつてマサキ君には好きな女の子がいるからねー」

「一〇一〇しているマコミちゃんは楽しそう、コウト君はふーんと言つだけで楽しそうじゃない。」

マコミちゃん白い息を吐いて、スケッチブックに描いている絵を見たあとコウト君をチラッと見た。

顔を真っ赤にしながらスケッチブックをカバンに入れる、そこを描いてあつたのは男の子の絵だ。

「やうやく」

何かを思ひ出したかのようなコウト君は、ストームの前に座つているマコミちゃんを横切つて黒板の前にやつしてきた。そしてチョークを掴み、黒板に何か文字を書き始めた。

チョークの音だけが響く教室、まるで授業中のようになつてゐる。こんな時少しでも音を出したら、注目の的になつてしまつよね。

「マコミちゃん、これ見てくれない」

書き終わつてマコミちゃんに手招きをした。

「何? 算数の計算わからないから教えてとか?」

振り向いて黒板に書いている事を見たマコミちゃんは、声が出ないぐりこびっくりした。何も言わなまま椅子から立ち上がり、黒板に近づく。

コウトヒマコリミラブ

黒板にはそう書いていた。マコリちゃんはコウト君を見た、しかしコウト君はいつもと同じ。自分が何をしたのかわからっていないのかな。

「ラブラブって何かマコリちゃんは知ってる? 僕はわかんないなー」

どうやらコウト君はラブラブの意味を知らないみたい、知らないのにどうしてこんな事書いたんだろう。

「まあいかー、別に知らなくても良こし。『メンねマコリちゃん、質問なんかして』

コウト君は黒板消しでその文字を消して廊下の方へと歩いていきます。大きな黒板の左下にちゃんと消せてない文字、ラブラブはありました。

「待つてコウト君ー」

教室中に響く大きな声で呼び止めたマコリちゃん、コウト君は待つてと言われたので立ち止まります。
おでこを押されてマコリちゃんのそばへと歩いてくるコウト君、ほっぺたが赤くなっています。

「なんかね、おでこが熱いんだよね、熱かも」

「……あとで保健室に一緒に行こう、私保健係だし」

「今すぐ行きたいんだけど、頭も痛いしー」

頭とおでこを押されているコウト君、ホントに辛そうです。保健係のマコリちゃん、早く保健室に連れていかないとー。

「私ね、コウト君の事が好きなの

「僕の事が?」

マコリちゃんはコウト君の手を引っ張った、そして手袋を取つて

コウト君に付けてあげた。

「ありがと」

「どういたしまして。でね、私はユウト君とラブラブになりたいの」「人差し指を窓ガラスに付けたマコミちゃん、今から何をするのでしょうか。

空いてる手でポケットに入っていたカイロを取り、ユウト君へと軽く投げた。

「口でも言つてもわからないと思つし絵で伝えるね、すぐに消えちゃうからよく見ててよ」

「う、うん」

冬はや、画用紙とかスケッチブックがなくても絵を描けるんだよね。

えっ、何処に描けるかつて？ 窓ガラスだよ。冬の寒い日は窓ガラスって、あたたまつた部屋の水蒸気で真っ白にくもつてるでしょ。だから冬だけ、窓ガラスは画用紙とかスケッチブックがわりになるんだよね。窓ガラスに描くなら、紙が勿体なくならぬし色んなトコロに落書きをしちゃうイタズラっこはママに怒られなくて済むんだ。

てかそんなトコロに描かなくて、砂があるとこなら年中絵を描けるよ！ コレなら窓ガラス同様紙が勿体なくならないしママにも怒られなくて済む、それに絵を残そうと思えば残せる！ 風で元に戻っちゃうから、風をふせがないといけないのが問題だけど。ああ、あと雨もだ。

「こんなもんかな」

マコミちゃんはあつという間に窓ガラスに、ネクタイを付けている人とスカートをはいている人が手を繋いでいる絵を描いた。背景は山に川に観覧車。

「これがラブラブ？」

「うん、二人はラブラブなんだよ。ラブラブな二人はとても仲良しだから、色々なトコロに遊びに行くの」

窓ガラスに描かれた二人は笑っていました、とても幸せそうにと

ても嬉しそう。」「

その時遠くの方から足音が聞こえてきました、もつ直ぐ休み時間が終わるから教室に戻ってきてるのかな。

「わかつたよ、わからぬよ」

「どうちよ」

「でも心に残つたよ、ちゃんとね」

「コウト君は一回りと笑つた。しかし、頭を押さえてしまふやうにしている。

マコミちゃんはあたふたしている。こんな時どうすれば良いのかな、人工呼吸するほど重傷じゃないよね、消毒しただけでは治らないか、と色々考えてパニックになつていてるかもしれない。

「コウト君、ほんとに熱あるの？」

「あるんじゃないの、おでこ熱いし」

「じゃあ確認するね」

勢い良くドアが開いて、クラスメイトが教室に入ってきた。楽しかったねーと皆笑顔だ、マサキ君一人を除いて。

マコミちゃんはコウト君のおでこに自分のおでこをつけていた、それを見たクラスメイトは口をぽかんと開けている。
「熱あるね、早く保健室に行きましょ」

「だからさつさつ言つたんだよー」

マコミちゃんはコウト君の手を繋ぎ保健室に行こうとした、しかしそこにはいたクラスメイトは田を手で隠していった。

「私今からコウト君を保健室に連れていくから」

首をかしげて、何やってんだろうと呟いたマコミちゃん。コウト君はクラスメイトを見て、真似をして田を手で隠した。

「マコミちゃん、やつぱつコウト君とラブリーブだつたんだね」

「もう一回キスしろー！」

「お幸せいね、結婚式には呼んでよ」

「ヒュー・ヒュー」

クラスメイトの皿は盛り上がりしている。コウト君とマコノちゃんはいつも一緒にいるから、ラブラブだと思われているのだ。
マコノちゃんは突然の事にオドロいて数秒白目になっていたが、何かに気付いたのか首をぶんぶん横に振った。
「違うの、アレは違うの… おでことおでこを付けてただけで、キスとかしてないの…」

一人がラブラブかはワカラナイけど、せつかもマコノちゃんが描いた絵と同じように今一人は手と手を繋いでいる。

黒板の左下にあるラブラブという文字は残っているけど、窓ガラスに描いたラブラブな二人の絵は消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5620d/>

ユウト君とマユミちゃん

2010年10月8日15時21分発行